

報告2 35周年記念シンポジウム報告

「豊かな人と人とのつながりを考える

ー 都市型地域社会づくりに大切なものは何か

5月26日(土)、地域交流センター恵比寿にて、NPO法人ぱれっと35周年記念シンポジウムが開かれました。テーマは、「豊かな人と人とのつながりを考える」。「ぱれっとの家 いこっと」の目下最大の課題が入居者どうしの間関係のあり方です。

障がいのあるなしにかかわらず、お互いが安心感を持って地域で暮らすことがいこっとの理念です。

このシンポジウムは、いこっとサポットの会のメンバーとぱれっとスタッフが実行委員会を組み、昨年から準備をしてきました。当日はシンポジストを交えながら、ぱれっと側から発題をし、パネルディスカッションを行ないました。

●ぱれっとからの発題

いこっとは現在、障がいのある男性2名と一般の女性5名が生活しています。一昨年、入居者が次々に退去してしまったことから、一般の不動産屋に募集をかけました。ぱれっとをまったく知らない方、障がいのある方との接点がない方がここに来て一緒に暮らすようになるという大きな変化がありました。いこっとを設立してからの8年間、知的に障がいのある方が一人暮らしを始める上での課題、また、障がい者と健常者が共に生活する上で生じる課題については想定していました。それら一つひとつを解決しながら、障がいのある方が一人暮らしに慣れ、健常者の理解が進み、共に住もう家としていこっとが成り立っていくことを期待し、私たちは側面的な支援をしてきました。しかし、コミュニケーション不足や人間関係作りの未熟さに伴う課題対応に苦慮してきたものがありました。このコミュニケーション不足は、決して障がいのあ

る人に限りません。健常者同士でも同様、人として共同生活を共にしようとした時に必ずコミュニケーション上の課題が上がってきます。その原因はどこに起因するのか、頭を悩ませてきました。

いこっとは、人間関係・コミュニケーションを特に大事にしながら住まい方を作っていくと考えた家なので、その根底でつまづいている現状があります。いこっとを建てた当初の思いをどう伝えていけばいいのだろうか、障がいのある方の住まい方の選択肢を広げてきたが、「人間関係づくり」において、今社会で何が起きているのか、大変大きなテーマですが、ヒントをいただきたくこのシンポジウムを企画しました。

(ぱれっとホーム 施設長 菅原睦子)

●シンポジストの方の活動紹介

今回のシンポジウムに、地域で自立生活支援を行なっている方や一般の方のシェアハウス運営及び斡旋している方をパネリストとして呼びました。当日の進行の中で、ご自身の活動紹介を交えながら、ぱれっと側からの発題に対してリンクする部分に触れていただいた内容をまずはご紹介いたします。

◇中村和利さん

NPO法人風雷社中理事長、風雷社中は主に大田区目黒区の一部で、居宅介護、移動支援、居宅介護事業所の指定を受け、相談支援事業も行なっています。この3年、重度知的障がいの方の一人暮らし支援を始めしています。身体障がいの重度の方たちは、24時間介護、ヘルパーをつけて重度訪問介護等で一人暮らしが可能です。いわゆる施設やグループホーム(GH)を使わない支援をこの20年構築してきました。知的障がい

の方に関しては、軽度の方はサポートを受けながら一人暮らしされているケースはありますが、重度の方は、親元・GH・入所施設という選択肢しかないのが現状です。私たちは重度の方でも地域の中でサポートを受けながら暮らしていかれる、施設でもGHでもなく暮らしていくという思いで、実践例としてシェアハウスで1例、民間のアパートで1人生活をしています。

風来社中は、個人に帰属したサービス、ホームヘルプ、ガイドヘルプとして、ヘルパーとしての対等性を持ってケアを担うことを法人の基本的な考え方として運営しています。

◇川西 諭さん

シェアハウス『みかんハウス』のオーナーをしています。『みかんハウス』はシェアすることによって経済性もありつつ上質な暮らしができるように、いいキッチン、いいお風呂、いいトイレ、庭もあります。人がつながるために大きなキッチンが必要と思い、コミュニティスペースにして、地域の人ともつながれるように工夫しました。

みかんハウスではお互いを知ることや話し合いが大切と考え、月に1回定例会を行っていますが、他の入居者への要望が多くさん出てきてしまいます。要望は正論なのでなかなか意見が言えず話が終わってしまい、人間関係が悪くなってしまう傾向にあります。それで悩んでいた時「北欧のシェア住居で入居者にお願いしている4つのこと」を知りました。①忍耐力②ユーモア③話を聞く力④交流したい気持ち。これが本当に大事なことで、色々なことが起きるが、深刻な顔をしているより笑い飛ばせるほうがお互いにとっていいと感じます。相互理解と忍耐も大事と思っていましたが、最近「寛容さ」なのではないかと考えはじめました。

◇齋藤志野歩さん

不動産業に携わり、家の貸借売買だけで

なく、主には、これからの暮らしを考えたい人の土地や家の活用を扱っています。みかんハウスも一緒に計画しました。不動産業界から2012年N9.5を立ち上げ、2015年『okatteにしおぎ』(シェアハウス)のプロジェクトをスタートしました。今は杉並区で社会教育事業をしたり、街づくり、空き家利活用の仕事を受けている会社です。「食を中心に置いた街のパブリックコモンスペース」、リビングとキッチン、シェアハウスに住んでない人も共有し、okatteにしおぎのメンバーが企画してイベントをすることもあります。

コミュニケーションについてですが、「過度に仲良くしようと思わなくていいです。相手の顔色をうかがったり、距離が近くなりすぎてしまったり、相手に干渉しすぎていますよ!」、と言うことが仕事として多くなっています。逆に距離を詰め過ぎた人を離すには当事者に言わないと難しい。また、「メンバーを外国人と思ってください」メンバーになったとたん考えが違うと言うことを忘れがちで、考え方の違いは日々あり、トラブルがないということはありません。

●パネルディスカッションの中から

いこつからの発題を受けて、いこつとを立ち上げた背景と、運営をする上での悩みである、コミュニケーションにおける課題を共有しました。このコミュニケーションの課題は、障がいのある人ない人も関係なく抱える課題です。入居者同士のコミュニケーションが取れないために、いこつとが大切にする「人間関係を大切にしたい暮らし」が実現しきれていないという課題定義からパネルディスカッションが始まりました。

パネルディスカッションでは、パネリストの皆さんが運営に関わっているシェアハウスも、人間関係における課題を抱えているのは共通していました。工夫がなければコミュニケーションが生まれず、取りにくい状態ということ。その中で、パネ

リストのみなさんが現場で実践されている工夫を共有して頂きました。入居者同士でコミュニケーションの基本ルールをつくる、コーディネータが第三者の立場で介入するなど、豊かな人間関係を築くための態度や方法について、参加者も交えながら議論することができました。

今後のいこっとの運営について、いこっどにおける一番の課題は、入居者同士で顔を合わせて話し合う場をつくることできていないことです。障がいのある人とない人が共に暮らす家をつくっていくためには、顔を合わせてコミュニケーションをとる場は必要不可欠です。この課題に対する答えは、まだ見えていない現状です。今後、いこっどの事業そのものの在り方をゼロから見つめ直し、引き続き「豊かな人と人とのつながり」を生むための暮らしの可能性を探っていきます。

(いこっどサポートの会

運営委員長 黒澤友貴)

●会場からの声

○言葉って大事。ダメとか嫌とかネガティブ発言だと誰も気持ちが上がってこないの、ポジティブな表現で、「今日は靴がきれいにそろえてあって気持ちよかったよ」と伝えとか。なかなかいい事って言葉にしないけれども、「あえてそういう意識でここでは過ごします、そういう風に表現してください。そうした学びが得られます」ということを入居前の説明会で入れておくと思います。いこっどは恵比寿で便利で人気のある建物なのだから、さらにそういうソフト面での学びがありますと言っておくと、「考えて表現する」ということをやりたい人が集まってくると思います。

○「北欧の4つのキーワード」に共感できます。またコミュニケーションのところで、最初から、違いやリスクがあるのだよということを伝えておくという考え方は勉強に

なった。また「仲良くしようと思わない」、「自分の役割を持って信頼関係を築いていく」「最初からこうあるべきだというよりは違いを認めて、無理やりではなく過程の中で信頼関係を作っていくというのには共感しました。

○川西さんや齋藤さんは、もともとコミュニケーションがある場でのトラブルや楽しさについて話してくださった。いこっどは障害のあるなしに関わらずいろいろな人が集まる場で、そこからどういったコミュニケーションを生んでいくのか、そのための工夫についてもっと議論してほしかった。共同生活や共生社会において「互助」のキーワードは大事。互助の空間や環境を気軽に作っていけるようになりたい。

●まとめ

パネリストからの実践紹介から、都市型地域社会ならではの多様な暮らし方が垣間見えたが、企画の趣旨である「豊かな人間関係づくり」までは残念ながら掘り下げることができませんでした。共同生活する上で、相手に対する言葉かけや配慮が、お互い気持ちよく暮らせる要因の一つに思えます。携帯電話のLINEやメモ書き程度でのコミュニケーションではお互い誤解が生じてしまいます。自分がどのように振る舞えばお互い良い関係が築けるのか。

「人間の行動が変わるのは、自分の感情が変わった時だけ。自分の感情が変わるのは、誰か別の人の感情に出会った時だけ。人が変わるには心が転換していく気持ちの切り替えが必要」という大きな気づきがありました。

ぱれっとは、元々「シェアハウス」を作りたかったのか、多様な住まい方の一つとして、共に暮らす家を作りたかったのではないか・・・もう一度原点にもどって、障がいのある人の安心・安全な暮らしを見つめ直す時期にきていると強く感じたセミナーでした。

(NPO 法人ぱれっと理事長 相馬宏昭)